

2020年1月21日(火)

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さん WS 絵巻・奈良絵本に見る日本 中世の庶民とその信仰

### 1, 梁さんの興味

絵巻の形状が持つ神秘性や不思議な力についての考察を深めている梁さん。一方で、2019年10月に開催したイベント<sup>1</sup>では、このような問題意識を語っていただきました。

梁さんは、貴族の文化・芸術とは異なり、民間のそれは意識的に残されることがないため、現代ではほとんど忘れ去られてしまっているという危機感を持っていらっしゃいます。そのため中国農村部の、失われつつある伝統文化や美術の研究や保護にも努めておられ、それらをモチーフにしたご自身の作品をとおして、現代における関心を高めることを目指しておられます。

日本の絵巻には、公的な資料では残りにくい、暮らしの風景も描かれているため、資料的な価値も高いと思います、と、語っていただきました。(2019年10月開催「デジタル発和書の旅 古典籍×〇〇ラボ」についての古典インタプリタ日誌より<sup>2</sup>)

そこで、これまで梁さんに伴走して下さっている恋田知子先生(当館准教授)に、特に絵巻や奈良絵本に、日本中世の庶民の姿や信仰の在り方がどのように描かれているのかについて教えていただきました。



<sup>1</sup> 動画はこちらから→<https://youtu.be/pNGsnp9CxDa>

<sup>2</sup>

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary\\_contents/event\\_20191005\\_ryo\\_matsudaira\\_kyoto.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/event_20191005_ryo_matsudaira_kyoto.pdf)

2020年1月21日（火）

## 2, 文正草紙に見る庶民の生活・異国の表現

まずご紹介くださったのは、とてもおめでたい「文正草紙」<sup>3</sup>。

常陸国鹿嶋大明神の大宮司に仕えていた文太（後に文正）が塩焼き（海水を焼いて塩をとること）で財を成し、授かった娘は帝に嫁ぎ、最後は宰相の位にまで昇ったというお伽草子を絵巻化した作品を見せていただきました。

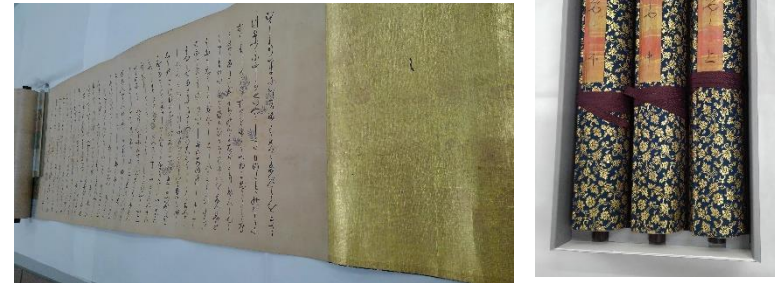


庶民が立身出世する「めでた尽くし」、祝言性の高いストーリーであるため、正月の読み始めの「吉書」や婚礼の調度品とされることが多かったそうで、その性格から豪華な絵巻や絵本に仕立ててあるもの

<sup>3</sup> <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200021064/viewer/1>

が多いのだそうです。

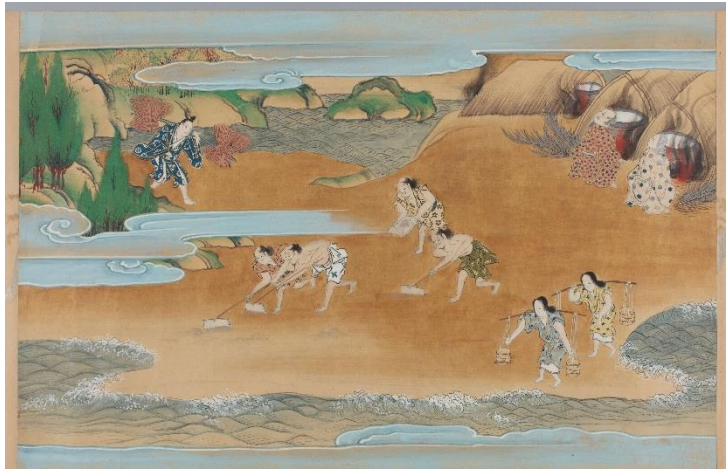
国文研に所蔵されている絵巻も、優美な詞書に緻密な絵で、三軸の豪華な仕立てであることから、嫁入り本だったのではないかと教えていただきました。



こういっためでたくて豪華な性格を持つ一方、塩焼きの様子が丹念に描かれるなど、当時の文化を垣間見せてくれる作品でもあります。

これには、貴族の、庶民の生活に対する興味が関係しているのだそうです。たとえば同時代には、さまざまな職人の仕事振りを描いた「職人歌合」のような作品も愛されており、「文正草紙」にもそういった性格があるのかもしれない。

2020年1月21日(火)



さらに恋田先生は、もうひとつの見どころを教えてくださいました。

それは、後に文正の娘と結婚することになる二位の中將に、「必ず恋する女性と結ばれる」と予言する「見通しの翁」の描き方のバリエーション。



この翁の不思議な力を表現するために、なぜか中国の仙人風に描かれている作品などもあるそうで、さまざま伝本の伝わる「文正草紙」であっても、そこには作り手の解釈があるのだそうです。

2020年1月21日（火）

### 3, 長恨哥の抄にみる画面処理の方法

中国唐代の玄宗皇帝と楊貴妃のことを詠った白楽天の漢詩「長恨歌」の抄（注釈）をモチーフに、日本でもさまざまな作品がつけられたそうです。



この日恋田先生がご紹介くださったのは、万治・寛文頃（17世紀半ば）に刊行された絵入版本『楊貴妃物語』を素材とした絵巻『長恨哥の抄』です。

版本を素材にして絵巻が作られる例はさまざまあり、最新の研究が多くあるところですが、違う形態で描かれた作品を見比べてみると、ジャンル（形式）ごとに表現の方法が異なることがわかるそうです。

たとえば版本をもとに絵巻を作成する場合、横長の画面になるため、異なる場面を同じ画面に描く異時同図法などが使われたりするそうです。たしかに、さまざまな場面や人物を描き込んで賑やかにしたいですね。



### 4, 絵巻をつくることもつこと

こういった例をとおして、絵巻をつくることや持つことの意味について一緒に考えました。

まずは書物としての格が高いので、武家が絵巻を発注して所持し、家柄の正統性を担保するといったことがあります。

一から絵巻を作るだけでなく、冊子本を絵巻にする場合もあり、元々持っている作品の格をあげたり、保存状態を保ったりするねらいがあるそうなのです。

2020年1月21日（火）

そしてもうひとつが絵巻自体のパワーです。「文正草紙」や「大黒舞」（2019年12月19日の日誌を参照）といった祝言性の高い絵巻を、お正月や婚礼といったおめでたい場でひろげて寿ぐという、縁起の良い絵巻や、鬼退治などを描いて、悪いもの、怖いものを封じ込めてしまう絵巻があります。

こういった例は、「絵巻」という形態自体に宿る性格なのですね。

そして絵巻には、庶民の生活や、龍宮や異国といった「異界」が好んで描かれるという一面もあります。

特に絵巻を所持したであろう貴族が、自分の知らない世界を垣間見たいという欲求があらわれているのかもしれませんが。

